

---

○議長（稲葉昭宏君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後 1時00分）

---

◇ 渡 辺 文 彦 君

○議長（稲葉昭宏君） 一般質問を続けます。

通告順位3番、渡辺文彦君。

（2番 渡辺文彦君 登壇）

○2番（渡辺文彦君） 通告に従いまして、一般質問を壇上よりさせていただきます。

この度私がこの一般質問で行いたいことは2点でございます。1点目は、先日行われました「まつぎきマイドリーム2016」についてでございます。2点目が、これも先日行われました「日本で最も美しい村」フェスティバルの開催にあたって、今後美しい村がどう展開していくのかということについてのあり方を問うこととあります。

この2点を私が質問する意図について先に述べておきたいと思えます。

町は27年度に総合戦略を策定しまして、今年度より地方創生に取り組むことになりました。この計画は、持続可能な地域社会を構築することにあります。このために地域の雇用の確保、観光業の振興、様々な取り組みが示されております。

この取り組みについて先に挙げた2点の問題と絡めて総合戦略の今後のあり方を問うことが目的でございます。

「マイドリーム2016」において生徒、児童より様々な夢が語られました。その中で、今日様々な地域において問題となっている少子高齢化のことに触れられた方が多くおられました。そのことに対し、雇用の確保また雇用の創出、さらに情報発信による交流人口の拡大等を訴えております。

このことは、児童、生徒にとってこれらの課題にあつては、自分たちはこの町が理想の町にならないということを表明しているのだと私は感じております。であるならば、町がこの発言に対して、町の活性化に真摯に取り組む姿勢を示さなければ、私たちは、もうこの町には住めないと言っていることと同じではないかと私は考えるわけとあります。

町は、地方創生に取り組む方針を決めています。それが本当に児童、生徒の期待に沿うものになり得るのかをこの場において確認したいと思えます。

2点目は、美しい村フェスティバルが10月に開催されて、多くの方がみえられたわけですが、

この催しを通して得られた成果および課題を検証するとともに、美しい村連合に参加することにより、いかに自立可能な地域社会を展望するかについて、今後のあり方を問うてみたいと思います。

私の壇上からの一般質問はこれにて終わります。

(町長 齋藤文彦君 登壇)

○町長(齋藤文彦君) 渡辺文彦議員の一般質問にお答えします。

1. 「まつぎきマイドリーム 2016 発表会」からみえる町の課題について。①「マイドリーム 1016」において児童、生徒 13 名に町に対する夢を語ってもらったが、そこでいくつかの課題が指摘されていた。それに対する町の対応について、2 点について考えを問いたい。

(1) 「少子高齢化の原因の一つに、仕事のないことによる若者の転出が語られていたが、それに対する、町長の答えは(解決策)は、いかなるものか」についてです。

未来を担う子どもたちにふるさとへの関心を高めてもらおうと 10 月 22 日に開催された「まつぎきマイドリーム 2016 発表会」では、町内の小学校 5 年生から高校 1 年生までの 12 名が参加し、松崎町の魅力を紹介いただくとともにまちづくりへの提案をいただいたところでございます。

当日は、議員ご質問のとおり、少子高齢化の原因として働く場所が少ないことを取り上げた発表がありましたが、1 人の発表者は、「この問題は簡単に解決できるものではなく、まず、町に住む人たちがこのことについてもっと真剣に考え、変わっていかねばなりません。松崎のために僕ができることは何かと考えると、少しでも町について考えること、できることから行動に移すことではないかと思いました」と述べています。

この発表を聞いて、松崎町を何とかしたいと自分事として考えてくれている子どもたちが多くいることが心強く、改めて子供たちのためにも責任の重さを痛感した次第でございます。

人口減少、少子高齢化は、全国的な課題となっており、一朝一夕で解決できるものではありませんが、第 5 次総合計画やまち・ひと・しごと創生人口ビジョン・総合戦略などに掲げた事業を町民の皆さまと一緒に着実に進めていくことにより、人口減少に歯止めをかけてまいりたいと考えております。

(2) 「松崎のよさをもっと情報発信して観光業を活性化させる必要があるのではないかの意見に対する町長の答えはどのようなものか」についてでございます。

今回の発表では、豊かな自然や歴史・文化、食など松崎町の魅力をインターネットやフェイスブック、ツイッターなどの SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) を活用し、

内外に情報発信した方が良いとのご提案をいただきました。

町では、これまでホームページで町のさまざまな情報を提供するとともに下田記者クラブとの月例定例記者会見や首都圏・中京圏などのマスコミやエージェントへの「松崎温泉郷だより」159 通の発行、取材対応を通じてテレビ・ラジオ、新聞・雑誌で松崎町を取り上げていただいております。

また、美しい伊豆創造センターや近隣市町、松崎町観光協会などとともに県内外でキャンペーン活動を実施し、町のPRをするとともに誘客を図っているところでございます。

なお、本年4月より町のホームページをリニューアルし、見やすくするとともに、フェイスブックによる情報発信を追加したところでございます。

町の魅力をさまざまな方法で多くの皆さまに伝え、町にたくさんの皆さまが訪れることが観光業を活性化する上で重要なことと考えておりますので、今後も情報発信には積極的に取り組んでまいりたいと考えております。

なお、町の情報発信は行政や観光協会のみならず、個人個人のクチコミによるところが大きいと考えておりますので、議員におかれましてもより一層のご協力をお願いいたします。

②「2017の予算編成にあたり、発表会で指摘された課題に、何らかの予算措置を考えているのか」についてです。

最初の質問でもお答えしましたが、「まつぎきマイドリーム 2016」では、明日の松崎を担う若い世代から、たくさんの提案や意見が発表されました。それぞれが、現在、松崎町が置かれている状況を的確にとらえていて、本当に子どもたちも町のことを真剣に考えてくれているんだなあと、改めて感激したところでございます。

提案された内容は、町のあり方としては、「活気があふれ安心・安全で住みやすい町にしたい」という気持ちが溢れていると感じました。また実施政策として人口減少と少子化の解消、観光振興、地産地消、空き家対策、環境美化など、多岐にわたって様々な提案をしてくれました。これらは、現在、私どもが取り組んでいる「賑わいづくり」「安心・安全対策」「福祉政策」に沿うものと理解しておりますので、新たな予算措置の予定はありませんが、現在推進している事業の充実を図っていきたいと考えています。

また、発表の中にあつた「ホットマツザキ」や「フードバレー」などの考えは、大変おもしろく何かヒントをもらったような気がします。これからも発表にあるような若い世代が住み続けたいと思える町を目指し、取り組んでいきたいと考えています。

2. 「日本で最も美しい村」づくりの今後について。①「県知事は基調講演で各加盟町村が個

性をいかした村づくりを進めることが重要と述べられているが、町を特徴づける個性とは何か」についてです。

去る10月6日から8日にかけて当町で開催された「日本で最も美しい村」連合フェスティバルの基調講演の中で、川勝平太静岡県知事は「加盟町村の持つ多様性が新しい時代の進むべき方向性を示している」と述べて、加盟町村が個性をいかした村づくりを進めることが重要であると述べていることは、広報松崎11月号に掲載させていただいたとおりです。

連合の設立目的は、「自然環境や景観、歴史、文化などの素晴らしい地域資源を持つ町が、自らの町に誇りを持ち、将来にわたり美しいまちづくりを継続することで、活性化と自立を図る」ことであり、平成25年度に当町が連合に加盟した際には、「石部の棚田」、「なまこ壁の建造物」、「塩漬けのさくら葉」を地域資源として上げたところでございます。

これらの地域資源は、いずれも町を代表する個性的な資源であるとともに、外部に発信していく上でも魅力的な資源であることから、地域や関係団体、企業、大学・学校など幅広い皆さまと連携して保全、利活用を図ってまいりたいと考えております。

②「平成29年度予算編成にあたり加盟団体より得られた事例を取り入れ、予算化するとしているが、具体的にどのようなことを考えているのか」についてです。

当町で開催されたフェスティバルには、新規加盟地域を含む57町村・地域や企業サポーターなど300名余りが参加し、交流を通じて互いに学び、連携を一層深めることができたものと考えております。

今回、フェスティバルの全体交流会に、北海道鶴居村から「さくらジェラート」の提供をいただきましたが、これは同村の生乳と当町の塩漬けの桜葉を使った連携商品で、今後、連合加盟の町村である岡山県新庄村の「ヒメノモチ」や山梨県早川町のハムやベーコンなどの肉製品などと塩漬けの桜葉を使った連携商品が開発できないか、相談してまいりたいと考えております。

また、「ふれあいと一ふや」を拠点とし、加盟町村である長野県木曾町や宮崎県椎葉村、富士ゼロックスなどをICT技術（テレビ会議システム）でつなぎ、都心部の企業社員が地域で働く、地域リモートワークシステムを検討していくことや、北海道美瑛町がヤフーなどの企業の社員と協力して実施している人材育成研修「地域課題解決プロジェクト」を企業と取り組んでまいりたいと考えております。

以上です。

○2番（渡辺文彦君） 一問一答でお願いいたします。

○議長（稲葉昭宏君） 許可します。

○2番（渡辺文彦君） まず、最初に、マイドリームで発表された生徒、児童を子どもたちという表現で統一させていただきたいと思います。

このことを私が今回取り上げたのは、子どもたちが大変有意義な提案をされているということがあるわけですが、それ以上に子どもたちが、あえて言うならば、今さらまたこの問題を取り上げているということが一番問題であるわけです。

この総合計画・・・、いま作られている総合計画、平成25年ですか、作られた時に町民のアンケートの中で町の活力が弱いということが一番問題であるということを経年の予算の審議なんかの時にぼくは表明したと思うんですが、今の若い方たちは、町が活気づいていないということが一番根拠にあって、その根拠にあって、その根拠・・・、活気づいていない理由は、仕事場がないから子どもが転出していくんだという・・・、そういうところに話が繋がっているように僕はみているわけです。

それが全てではないですが、そういう中で、やっぱり子どもたちがいまここに仕事がないという実感があるというのが現実なんです。

今まで町はそのことに対して取り組んできているはずなんですけれども、結果が出ていない。このことが問題だといっているわけです。なんでこの結果が出ていないのか。これをいま町長が取り組んでいるとおっしゃっているんですが、この結果は・・・、次の子どもたちがいい町だなと実感できるのは、何年先なんだろう、このままいったら・・・。

その辺・・・、町長が本当に自分たちのやっている今の施策が子どもたちの期待に沿うのか、いつ期待に沿えるのか、その辺をちょっと表明させていただきたいと思います。

○町長（齋藤文彦君） 子どもたちの意見も千差万別でいろいろあるわけですが、いま子どもたちの中にも松崎町の現状を的確にみていて、松崎町がやっていることが良いこと、悪いこと、いろいろ発表されたわけですが、私たちはやっぱり人口を増加させて、仕事を増やせといたって、いま松崎・・・、日本全国でも人口の減少が始まっているわけで、東京都の区でも人口が減少しているということがありまして、なかなか仕事を・・・、人口を増やせというのはなかなか難しいと思いますけれども、私はいつも言っている松崎の基幹産業は観光です。そして、その下に第1次産業である農林漁業を下に入れて、観光業を活性化していく、体験・滞在型、保養型の観光地を目指しているわけですが、それがなかなか皆さんの目に見えるような形が出ていないところがあると思うわけですが、松崎町が生き延びるためにはこれしかないと思っていますので、進めていきたいなと思っています。

私は、子どもたちの中でもシーカヤックに乗って松崎町の良さがわかったとか、いろいろあるわけですが、子どもたちのいろいろな意見を取り入れて、やっぱり自分たちがやっていることをちゃんと推し進めて、子どもにもわかるようにしていくのが一番いいかなと思います。

○2番（渡辺文彦君） 町長の発言は今までどおりの方針でやっていけば、おそらく結果が出てくるだろうということだとは思いますが、ぼくはその辺に対しては疑問符がちょっとつくもんで、あえてこうやって質問しているわけであります。

そもそもこの松崎にとって、少子高齢化ってどういう問題を含んでいるとお考えですか。その辺を確認して、その共通理念からでないと話がちょっと難しい・・・、食い違ふのかなと思うもんで、少子高齢化をどのようにとらえているか、ちょっと町長・・・。

○町長（齋藤文彦君） 少子高齢化というのは、本当に松崎町の一番の問題で、子どもが少なくなる、歳をとってくるということで、藤井議員の方でも話しましたが、やっぱり税金を納める人がだんだん少なくなってくると松崎の経済力が弱くなって、だんだん疲弊していくということがあると思いますので、そのところをうまくやるのが町政だと思っています。

○2番（渡辺文彦君） 今、我われの自治体もそうなんですけれども、多くの自治体が基本的には3割自治といわれて、自主財源が3割、あと7割が国なり県なりの補助金なり交付税で賄われている現状があるわけですね。そういう中で、仮に少子化が進んで、仮に今の人口が5000人になって・・・、税収は当然減ります。もちろん交付金も減るでしょうけれども、それに見合った経済というか・・・、財政運営というのが、おそらくされていると思うんですけども、その辺、総務課長、どういうふうに考えますかね。

ぼくは、人口が減っては・・・、もちろんぼくは減ることは賛成して言っているわけじゃないんですけど、減ってもそれに見合うだけの財政規模っていうのは整ってくのかなという気はするんですけども、その辺はどう思いますか。

○総務課長（山本秀樹君） その人口規模とか、そういうものに見合った財政力がどのくらい必要かということについては、これは全国一律ですけれども、基準財政需要額というような形で試算をされまして、それに基づいて、例えばそれが20億円という形になれば、税収が全部で8億円しかないよということであれば、残りの12億円は、交付税でやりましょうというのが今の日本のシステムという形、簡単に言えばそういう形になっているわけです。

そういう流れの中で、予算を組んで、いろいろの対応をしているというような形になります。ただ、今まで企業誘致とかいろいろな施策もやってきましたけれども、なかなかやっぱり笛吹

けども踊らずというか、なかなか食い付きがよくないというのが現実でして、現実問題としては、そこをいかに下から盛り上げてもらうのかというのが課題かなと思います。

今までもそうですけれども、今後も力を入れていくのは、民活というような形のところですね。民間の活力をいかしていこうというような形で、先ほど来、午前中もちょっと議論になりましたけれども、新たな起業に対する支援制度を設けるとか、それから、いろんな地域の特徴をいかした産業に支援をしていくとか、ふるさと納税等も含めて、それに伴って儲ける形をできるだけ住民の方々に場を提供するとか、そういうものに取り組んできているわけですけれども、それがまだ踏み出し始めて間もないということでは、なかなか広く伝わっていったいないというのが今のところかなと・・・。

ただ、町長の答弁にもあったとおり、一朝一夕にいくところではないものですから、継続は力なりという言葉もありますので、引き続き力を入れてやっていくのが町の姿勢かなと思います。

○町長（齋藤文彦君） 反問権でちょっと聞きたいわけですが、渡辺議員は今年度の予算にも反対したわけですが、人口を増やし、また少子高齢化をなくして、松崎町をこういうふうなことをやったら、町は元気になると思いますか。提言いただきたいなと思います。

○2番（渡辺文彦君） このことは、以前から私はもう自分の考え方というのはあったわけですが、この度事務局が議員研修の中で群馬県でしたか、上野村を紹介してもらいました。そこに行って、やっぱり自分のやっていることは間違っていない・・・、考えていることは間違っていないなということを実感したわけです。

上野村で取り組んでいるのは、村が主体的に事業を興しているわけです。実際に地域資源を活用して、その資源を利用して地域の産業を生み出し、雇用を拡大しています。実際、今、町の工場なんかもやっているんですけども、従業員75名を確保したいということで取り組んでいるんですけども、売上がそこまでいっていないので、いま50名程度だということでした。

ずっと長年村長がその・・・20年近くですかね。40年近く村長をされてきて、ずっと町を興していきたいということを考えながら、村長は自らの村が主体的に取り組まなければいけないということを、方向性を出して、地域に人を呼び込むにも仕事と住宅は絶対必要だと、それは確保しなければ人は来てくれないんだということを前提に事業を進めてきている村でした。

これから、僕はどう展開していくかわからないんですけども、村が・・・、町が取り組む姿勢はおそらく今、ぼくは、こういう結論づける理由は、地域・・・、おそらく、町長の考え方は民間ということが基本にあるわけですが、民間がその力も経済力、能力も人材ももって

いるところはいま松崎にどれだけあるでしょう。

商工会に行って、松崎で事業を興せる人がどれだけいますかと聞けば、ほとんどないと言われます。こういう状況の中で、民間に事業の拡大を望んでいくのは・・・、いつまで経っても町は現状転換できない。ぼくはそう考えている。だから、もっともっと主体的に事業の方向性・・・、雇用を増やすなら、雇用を増やすためのシステムづくりを町が主導すべきだとぼくは考えています、基本的には。

例えば、桜葉・・・、松崎にとっては貴重な資源ということで、同じ考え方であるわけですがけれども、桜葉なら桜葉を中心にして、地域の中で金の回るシステムづくりをまずする。その体制づくりをすることが必要です。民間の桜葉振興会に何とかしてくださいよじゃなくて、町が積極的にこういうふうにするから協力してくれというような方向性を出さなければ方向は変わらないです。僕はそれを言いたいんです、ずっと。

その辺で、町長、また何か反問があったら結構です。

○町長（齋藤文彦君） 考え方としては最高だと思いますけれども、私はやっぱり松崎の役場の役目というのは、町民の皆さんがうまく働けるような舞台を作る。その舞台の中で思い切り動いてもらいたいなと思っています。

役場がなかなか、商売をするというのは非常に後あとを考えると厳しいところがありますので、私は言っているように役場というのは、本当に舞台を作って、町民のやる気のある皆さんたちを含めて、全部がうまく動けるようなシステムを作るのが、私はまちづくりだと思ってやっていますところでございます。

○総務課長（山本秀樹君） 雇用の確保という点についていえば、昔でいう町営のまつぎき荘、今でいう振興公社、ここでも雇用の場の確保ということで、あえて、なかなか苦しい中で、町の方で出資をしてやっているというような事例、それはもう既にうちの町の方では、かなり前から取り組んでいるということになると思います。

いま我われが進めているのは、何度も皆さんの前で話をしていますけれども、道を通れば、ここで35万人の周遊客があるといっても、それ以上の100万を超える人間が通っているわけですね。そういう中で、それをいかに多く松崎の町の中に一旦止まってもらって町の中を回遊してもらおうか。そして、できるだけお金を落としてもらおうという人通り、人の波ができてくれば、そこにビジネスチャンスが生まれてくるというようなことから、我われの方はその土壌づくりということで、いま進めているという状況でございます。

○2番（渡辺文彦君） 町長の考え方は町民でというところに落ち着くんだと思うんですけど

も、それはそれで別に否定するのではないけれど、町の・・・、町民の中にそうやって本当に活力、意欲をもって活動できる人間が本当にいれば、ぼくはこんなことは何も言わない。そっちを積極的に支援したいわけですよ。そういう現状、商工会に行っても話をしても見えてこないです。この状況の中で、どうやってこの町に雇用を創り出すのかとなった時に、やっぱり動けるのは行政かなと思わざるを得ないわけです。実際、上野村も雇用をつくっています。松崎も振興公社でやっているじゃないかと言うかもしれないですけども、みんな赤字です。赤字と黒字・・・、上野村もまだ若干赤字のところもあるわけですけども、取り組み方の姿勢は全然違います。一度町長も行かれたらいいかと思うんですけども、やっぱりなんかこの町を何とかしたいという気持ち職員の中にも感じるんですね。だから、そういうふうなことになっていかなとちょっとまずいのかな、それはちょっと話がずれてしまうんですけども。結局、町が活力を・・・、子どもたちの提案というか意見の中に、町が活力がないのは仕事場だというふうに言っているわけですよ、みんな、何人かが。これは間違いない、事実ですよ。ぼくが言っていることじゃない、子どもたちが言っていることだから・・・。

だから、それが何でそういうふう子どもらを感じているか、子どもらにそれを説明できなかったことなんですよ。子どもらに私はこんなに働いているじゃないかと、なんで仕事をやらないんだと・・・、町民がやらないんだよと言って、それで子どもたちが納得してくれるならば、これはそれでいいんですよ、要は。おそらく、そうですかね、ぼくはそうは思わないんですよ。観光に関して、ぼくは次の問題の中で情報発信ということに触れているわけですけども、子どもらは、町が情報発信をちゃんとしてないから、観光客が来てくれないというふうに把握しているんだとぼくは理解しているわけです。

町側は情報発信してますよと言っているんだけど、子どもたちの目では情報発信が適切にされてないと理解している。ここに食い違いがあるわけですよ。

もし、子どもらがちゃんと発信されているというふうに理解しているならば、こういう提案は出てこないはずですよ。それに対して、おれたちはこんなにやっているじゃないか、これはなんでだと・・・、子どもらにしてみれば、実際に観光客が減っているわけじゃないですか、それは何でだという説明がつかないじゃないですか。情報発信を適切にして、お客が来てるんだって100万の人が来て止まらないと言っている。そこらの方法を考えているよと、これ、いま考えることじゃない、はっきりいってずっと前から考えておかなければ、いま考える話ではない、これは、はっきりいって。ずっとやってこないから、子どもらがこのことをまた言っている。

かつて総合計画を作った時も同じことが提案されている。総合計画に情報の共有化に対して、一本化するみたいなことを書いてあるんですね。

情報がいろいろ・・・、パンフレットとか何とか・・・、作っているんだけど、情報を共有して一本化して町のアピールをしたいということはなされている・・・、やっているはずなんですよ。おそらく町はそういう活動を。にも関わらず、子どもたちは、やっぱり人が来ていないのは、情報発信がされていないんじゃないですかと捉えているわけですよ。そうじゃないですか。

○町長（齋藤文彦君） ちょっと渡辺君のあれは一方的すぎるんじゃないの。何人もそう言っているわけじゃない。松崎町はいろいろ情報を発信していますよ。私はいろいろ新聞を見て、松崎町が出ているやつを毎日集めていますけれど、莫大な量になっています。

それで、ある町の議員さんと話をしていて、「どうだい」という話をしたら、「松崎町はすごいじゃ、おらの方も負けないようにやりたいよ」というようなことを言っていますよ。

ただ、宣伝とか何とかは町だけじゃなくて、今は個人からの情報がものすごく出ているし、各商工会、観光協会も出ている。松崎町は情報には、いろいろいい方についていると思いますよ。ただ、どれがお客さんに繋がるか、繋がらないかというのは非常に疑問があるわけですが、松崎町としては、情報発信は非常にうまくやっているなと私は思っています。

○2番（渡辺文彦君） だから、おそらく町は一生懸命情報を発信していると、それはぼくも評価しないわけじゃないんです。ただ問題は、町長がさっき最後に触れられた、それが成果が出ているか、出ていないか、そこなんです、問題は。成果が出なければ、やっぱり無駄金を使っていると言ったらおかしい言い方ですけどね。適切な表現ではないかもしれないけれど。やっぱり効果的な情報発信、それに見合うだけの費用対効果が得られなければ、やっぱりちょっとその辺は不備なのかなと思うわけですが、でも・・・。

○町長（齋藤文彦君） 成果が出ていないとか何とか言いますが、土曜日、日曜日になると、本当に街中を歩いているとかなりの観光客の人が走っていますし、あとは流行っている店なんかも数珠なりになっている店があるわけですよ。それはもうみんな店は店で情報発信していて、松崎町だってそれなりに情報発信しているからお客さんが来るわけで、そんなに松崎町は情報が少ないというようなことではないと、私は思っています。

○総務課長（山本秀樹君） 今までそういう、こういう現状は昔からやっぱり議員がおっしゃるとおり昔から続いていまして、それを打破するためにいろんな取り組みをしてきたわけです。ただ、これは、要は、この問題を解決する絶対的な方法というのが全国どこにもまだ見出されて

いない。要は、答えがない中をいろんな形で模索しながらやっているというのが現状で、その地域が置かれた状況にも、東海道筋で同じことをやるのとうちの方で同じことをやるのとやっぱり条件が違いますので、そこがうまくいくかないはあると思いますけれども、いろんな形で取り組んできている。ただ、なかなか実績が出ていないということから踏まえれば、十分にそこが今までやってきたかと言えば、我われもそうじゃない、なおかつもっとやるべきだという認識はあります。ただ、そこで、今までと同じようなことをやってもなかなか難しいのであれば、次は、こういう形をやってみよう、次は、こういう形をやってみよう、こういう方々からヒントをもらって、じゃあ、こうしてみようというような形で、いろんなところを、ベースは同じでもいろんな方法を変えながら取り組んでいるというのが今までの流れということをご理解いただきたいと思います。

だから、今回のマイドリームの中でも、子どもたちの提言というのは、こう思うという抽象的なことはやっぱり出ていますけれども、やっぱりあの中になかなか具体的な案というのは出てこないというのが現実で、答えがわからないからだと思います。

ただ、その中で、町長の答弁にもありましたとおり「ホットマツザキ」ですね。いまクールジャパンというのがよく言われていますけれども、日本らしいスマートなやり方じゃなくて、松崎は来た人を温かく迎える「ホットマツザキ」という考え方で迎えた方がいいとか、そういうようないろんな新しい考え方も示してくれましたので、そういうのは逆に言えば、一つまちづくりに取り入れても面白いのかなというようなヒントもありますので、なにしろ、今の現状を打破するためには、今までどおりじゃなくて、もっとほかのことにチャレンジしようということで、いろいろな形を模索して美しい村にも入ったりとか、そういうところからヒントを入れようとか、いろいろそういう試みをしているということでございます。

○2番（渡辺文彦君） 役場の内部の中では、いろんな情報を共有しながら情報交換して検証されているんだろうと思うんですけども、やっぱりぼくが見ていて、子どもが見ていて、どこが改善されているというのが見えてないんじゃないかなと思うんですね。いろんな改善はされているんだと思うんだけど、いろんな取り組みがされているんだろうけれども、ただその評価というのが基本的には結果論でしか出てこないじゃないですか、我われは。途中どんなことをやっても、ある程度こういう宣伝をしたからこんかいお客さんが来たんだよとかという・・・、こういうイベントをやったからこんかい来たんだよという、そういうところでしか把握できないじゃないですか、基本的には。

そう考えれば、子どもたちの視点から見れば、いろんな情報をもし発信しているのならば、

松崎の観光業はもっと発展していてもいいはずだという考え方がおそらくあると思うんですよ。観光業が衰退しているということは、やっぱり松崎の地域資源そのものに問題があるのか、情報が発信されていないのかということになるわけですがけれども、子どもたちは松崎の地域資源は・・・、いい町だ、いい町だからこの町をもっと宣伝して欲しいと言っているわけですよ、おそらく。結局、何人かが書かれているわけですよ。だとすると、やっぱり発信の仕方は・・・、しているんだけど、成果が表れてこないことに対しての検証がやっぱりされていないのかなという気がするんですけども、その辺はどうなんですかね。

○町長（齋藤文彦君） いろいろ問題もあると思うわけですがけれども、平成4年くらいですか、流動人口が90万人位あったわけですがけれども、今は35万人位ということで、松崎町にもやっぱり宿泊施設、民宿がだんだん少なくなって非常に泊まる場所がないと、そして、日本全国総観光地化でいろいろな手を打っているわけですから、伊豆半島だけ来いと言ったってなかなか難しいわけですがけれども、やっぱりこの子どもの・・・、やっぱり活性化の私は一丁目一番地は道路だと思っていますので、子どもにも書いてありますけれども、道路をちゃんと整備してくれということで、伊豆半島は伊豆縦貫道を伊豆半島全部で今やっているわけで、また下船原のバイパスとか何とかちゃんとお願いしているわけですがけれども、あそことか何とか、やっぱり道路がちゃんとしてくるとそれなりにお客さんが入って来ている。

そして、今をみても、本当に土曜日、日曜日なんかは、ほとんどお客さんが入って来て、松崎を通過していくのがあるんですけども、泊まる人がちょっと少ないかなというような感じがあるわけですがけれども、もっと本当は観光協会を中心に宿泊業者の皆さん方ももうちょっと松崎にお客さんを呼び込もうというような・・・、商工会と本当に二輪車でやってもらわなければ、松崎は元気にならないと思っていますので、それを役場としては後押ししたいなと思っています。

そして、私は、今度の土曜日、日曜日は伊豆トレイルジャーニーがあるわけですがけれども、本当にすぐ1500人位集まるわけです。私は、シーカヤックマラソンとウォータースイミング大会をスポーツ3部作でやってきたわけですがけれども、ウォータースイミング大会も地域の皆さんがもうやれないということでなくなって、シーカヤックマラソンも非常に厳しいところで、本当に何と申しますか、その地域の地域力がものすごく弱くなっていて、やっぱりコミュニティを強化しなければ、これから非常に厳しいところがあるなと思っています。

いま石部の大地曳き綱まつりに常葉大学の皆さん方がものすごく協力してくれているわけですがけれども、やっぱり松崎のイベントにも、地域だけではいろいろできないので、そういう力

もお願いしてやっていかないと、松崎町になかなかお客さんを呼ぶこのはできないと思いますので、そのようなことも加味しながらやっていきたいなと思っているところです。

○企画観光課長（山本 公君） 確かに松崎町にある魅力的な資源を情報発信をうまくやっていかなければならないということは当然あるわけですので、町長の答弁の中にもありましたけれども、ホームページの中にフェイスブックみたいなものも新たに加えたりして、より皆さんに広がるような形の取扱いも4月から始めているところですので、そういったものをまた考えていきながら、新たなものを加えていきながら、そうはいつでも魅力的な資源がないとだめなわけですので、地域の資源、そういうものを磨き上げていくと、みんなで磨き上げていくという行動もとっていかねばならないだろうと思いますので、またご協力をお願いします。

○2番（渡辺文彦君） 時間も少なくなってきましたもので、この問題を2番目の問題の美しい村と絡めながらも少し考えてみたいと思いますけれども、一応、美しい村の地域資源として、棚田となまこ壁と桜葉があるわけですね。桜葉に関しては、ぼくは非常にとっつきやすくて話は進みやすいんですけども、なまこ壁とその棚田ですね。これに対して、地域資源としてどれだけ松崎のアピールを出せるのかという・・・、棚田の百選とかを見れば、みんなそれぞれどこも美しいわけです、棚田は。松崎はここと比べて、どういうふうに違うのかなと・・・、松崎はどこで秀でているのかなとか、そういう特徴がみえてこないわけですね。松崎ならではの・・・、そういう棚田の資源でどこですかね。

○企画観光課長（山本 公君） おっしゃるように棚田百選ということで、百を超える棚田が全国各地にあります。松崎町の・・・、当時申請したようなんですけれども、放棄率が高くで選定されなかったというような経過があるわけなんですけれども、そうは言いましても、耕作放棄されていたものを地域の皆さんが復田をして、いまオーナー制度というものを県の中で一番最初に導入して保全に当たっていると。その棚田からは駿河湾越しに富士山が見えるという素晴らしい絶好の位置にあるので、そういう面では、ほかの棚田とはちょっと違うかなと思いますし、その取り組む姿勢ですね。それと周りの支援してくれている皆さんがやはりたくさんいる。年齢は高くなっていますけれども、それを支援していこうという方々もかなり出てきていますので、そういう部分はほかとちょっと違うのかなと感じます。

○2番（渡辺文彦君） 棚田の件に関して、一回荒れたものをもう一回再生したというところに価値があると・・・、ぼくは本当にそれはすごいことだと思います。これは本当に評価すべきことだと思います。

そういう中で、町長が、町を活性化させるには、地域の住民とともにとよく言われるわけで

すけれども、確かにそういう一つの例であるかとは思いますが。そういうところに・・・、棚田はある程度、そこで成功はしているんですけども、例えば桜葉振興に関してもまだまだ桜葉生産者との共通の理解がされていないということもあるような気がするんですね。それと同時になまこ壁についてなんですけれども、なまこ壁もこのあいだちょっとある方と話をしていたら、よその観光客の方がなまこ壁を見て「たったこれっぽっちか」という表現をするらしいんですよ。そうすると、松崎のなまこ壁っていったいどういう価値なんだろうと・・・、ぼくも家の方にもいくつかあるわけですけども、そっちの方までは観光客の方は来ないわけですよ、基本的には。

だから、あの一角だけ見れば、なまこ壁の施設はないんですけども、その話をされた方は、こういう昔の資産、遺産を町民が大切に思っていること自体が大切なんじゃないですかということをおっしゃっていました。ぼくはまさにそうだと思います。それがみんなに共有できるかどうかということなんです、要は。

いま新しい家がどんどん、どんどん建っています。何人か建っていますよね。その方々に松崎のイメージとしてなまこ壁を配置してくれないかといってやってもらえるのかなと・・・、その辺も本当に町民がこの町をなまこ壁の町として売り出したいならば、自分たちの家の中にもそういうことが取り組んでもらえれば、町民も共有しているという感じだとれるわけだけでも、ただ昔のままのものがあって、それを存続するのが・・・、保存していくのが現状としては大変な状況にあるわけですよ。その中で10棟位を選別して集中的に保全していこうみたいな動きがあるのかとは思いますが、それだけで松崎のなまこ壁の価値、存在はアピールできるのかなと・・・、実際なまこ壁の様式というのは、日本中あちこちにみられるわけですね、松崎ばかりじゃなくて。だから、松崎のなまこ壁というやっぱり価値づけはどこにされるかというと、町民自身がこの物を大切にしているんですよというところではないような気がします。そうすると、それをどうやって多くの町民に共有してもらうかということが非常に大切なのかなと思うわけですね。

依田邸のところで、なまこ壁の保存について考えるワークショップがあった時に、大沢の方が誰も参加しなかったです。主催者側が呼びかけなかったこともあるのかもしれないですけど、地域の方を巻き込んでいけないような活動はやっぱりちょっとなかなか地域に定着しないのかなという気はします。だもんで、もう少し地域を巻き込むということが大切であるならば、巻き込み方をやっぱりもっと研究した方がいいのかなとぼくは思うわけですね。その辺を検討していただきたいと思います。

時間延長をお願いします。

○議長（稲葉昭宏君） 時間延長いたします。

○企画観光課長（山本 公君） なまこ壁の建物は、いま 90 棟位あるわけですが、おっしゃるように、松崎町の伝統的な建物ということの中で、それは地域の皆さんが守ってきられているということがあるわけでございます。

それから、「日本で最も美しい村」連合に入った時の地域資源として一つ取り上げたのは、やはり皆さんにその大切さというのを理解してもらうがためにそういうものも入っているということでございまして、子どもたちにおいては、なまこ壁のクリーニング活動みたいなものも始まったりとか、あるいは蔵づくり隊による保全活動ですとか、そういったものもあったりとか、あるいは協議会の中でも協議がされているという部分もありますので、住民の皆さんを巻き込んで、地域の宝としてやはり守りまた活用していくということをしていかなければならないなと考えています。

全ての建物をなまこ壁にしてくれというのはなかなか難しいところがあるのかもしれないですが、今後景観計画を立てていく中で、そのエリアに合った建物を考えていくと、そういうことが当然出てくるかと思えますし、また現有であるなまこ壁についても、重要なものについては一部補助を出していくとか、そんな形のもが考えられるかと思えますので、今回出ている交付金の中でいろいろ検討してまいりたいと思えます。

○町長（齋藤文彦君） 蔵は保存しろ、保存しろといってもなかなか人件費がかかるわけで、非常に難しいわけですが、やっぱり蔵らさんとか伊豆文邸とか、山光荘みたいによくそれを使って、活用しながら稼げるようなものが一番いいのかなと思っています。と一ふやさんも私はそうだなと思うわけです。

それで、依田邸が本当にあのなまこ壁の総本山みたいなところですから、あれと、道の駅とドッキングさせて、そして情報を発信していきたいなと私は思っています。それになりできるかなと思っています。

ただ、地域の人不参加しないのは本当に反省しているところで、やっぱり地域が盛り上がらないとどうしようもありませんので、そのことはやっていきたいと思えます。

ただ、渡辺議員の話の聞いているとちょっとマイナス思考が強すぎるんじゃないかと・・・、もうちょっと町民が、全員が宣伝マンみたいになって、松崎を宣伝してもらうわけですから、もうちょっと明るい目で見たい方がいいのかなと、答えながら、そう思っているところでございます。

○2番（渡辺文彦君） 僕は悲観もしますけれども、楽観もしないです。やっぱり現実を正確に把握して、その中から自分の考え方をやっぱり導きたいと思います。ただ、やっぱり暗い展望の中ではやっぱり将来性がないから、明るく考えたいとは思っています、基本的には。明るくするには、現状を正確に把握しなければ、スタート地点にも立てないと思います。

現状維持は後退であるとのあいだ東京都知事も言っていましたけれども、現状維持ではやっぱりまずいわけですよ。新しい展開がされていかなければいけないと・・・、新しい展開を考えるには、やっぱり現実を正確に把握するということが、ぼくは非常に大切なことだと思う。

もう時間がありませんもので、最後に一つだけ確認したいことがあるんです。桜葉振興予算が今年 1000 万円ほど付いているんですけども、もうだいぶ時間も経ってきたんですけども、どのようにお金が使われているのか、その辺を教えてくださいたいんですけども。

○産業建設課長（高木和彦君） 時間の関係もありますので、細かい内容については、補正予算のところで行っているはず。その中で、やはり先ほどのほかの議員さんの質問の中にもありましたけれども、やればやるほど生産に携わっている方にもっと入ってもらいたいというのがあります。

そういう点では、長嶋議員の方で月にいっぺんは関係者が集まって相談したらどうかということもありますので、本当にこのままですと衰退してしまいます。平均年齢が73歳、生産高も昔は200万束が、今は50万束ですか、そういうふうに非常に少なくなっています。その辺については、私どもの方でも単に、今年の1年間の1000万円だけじゃなくて、農薬の関係ですとか、そういうことも研究しながらやっているところがございます。

一つだけ、ちょっとこの話とちょっとずれてしまいますけど、私も産業の課長ですから、いろいろお話を聞いて来ました。その中で、「役場でどうにかしろ」ということが出ましたけれども、極端な話ですけども、松崎の中に産業が一つもなくとも、例えば、30分で沼津に行けるとなると、全部をそこで借りることができれば、産業が一つもなくともやっていけるそうです。ただ、それは極端な話です。ただ、そういうことに、地形的なことですとか、地理的なことですとか、また各町内にお店があります。河津で白いご飯の上にわさびを乗っただけでお客さんがわんさか、わんさか来てくださいます。やっぱり飲食店にしても民宿、旅館にしてもそういう努力をして、やっているところというのは、それなりのお客さんが入ると思うんです。そういう個人の努力もしていただいて、そこで情報が苦手な方については行政が助けてやる。そういうことが本来じゃないかなと、そうすれば、自ずと全体的な活性化は進むと思います。

ましてや、情報発信が少ないというご指摘もありましたけれども、情報発信だけで活性化が

できればということは思いません。そこは工夫だと思います。すみません、余計なことも話しましたけれども。

○議長（稲葉昭宏君） 渡辺君、まとめてください。

○2番（渡辺文彦君） 時間がなくなりましたので、まとめさせていただきたいと思います。いろいろ子どもたちの声を聞いていろいろな自分の言いたいことを言ってしまったわけですが、ただ、ここでぼくはやっぱり感じたことは、子どもたちはこのままではこの町に住めませんよと言っているんですね。間違いない事実なんですよ、この文面からは。ここに仕事があれば、私たちはこの町では活躍できないじゃないかと、活躍の場所を作って欲しいと言っているとぼくは読み取ったわけです。町長がどうとったか、ぼくにはわからないわけですが、そういうことを受けて、ぼくらも町もこの子どもたちに応えていく責任があるんじゃないかと・・・、その意味でぼくは問題点を整理して、今後の方向性を出せたらいいかなと思って話をさせてもらったわけで、あくまでもこの町が将来にわたって持続可能な町であるようにということを願っていますので、そのためにできることを、意見の対立はあるかもしれませんが、その中でいかにせるものはいかしていただきたいなと思います。

○町長（齋藤文彦君） 子どもたちの発表の中で、それは、渡辺議員はそういうふう感じたかもしれませんが、私は本当に聞いていて、子どもたちが本当に松崎町に愛情を持っていて、こうしたい、ああしたいといろいろな提案をしてくれて、私は本当にいいことだなと思っています。

子どもたちは、ここに住みたくないとか何とかというのは、私は聞いていて一つも感じなかったわけですが、本当に松崎のためにいろいろ提言してくれて、こういう松崎になればいいなと私は受け取ったところです。

○2番（渡辺文彦君） 僕が、この町に子どもたちが住めないよと言っている意味は、すごく拡大解釈であるということは確かです、これは。でも、現実に子どもたちが流出している現実があるわけです。そのものに対して、どのように解決するんですかという話なんです。要は。単純に言えば。この子どもたちが・・・、さっき松高の話もあったんですけど、子どもたちが松高じゃなくて、下田高校なりほかの高校に行くのは、なんですかということですよ。この町の中に留まれない理由があるから、そこに行く、それを全て解決できるとは思わないけれども、解決できることは解決していかなければ、いけないという考え方でぼくは臨んでいるわけです。全て子どもたちの中で期待しているわけでもないし、悲観しているわけでもないし、できる範囲の中で、子どもらの意見を尊重しながらいい町ができればいいかなと考えています。

○議長（稲葉昭宏君） 終わってください。

○2番（渡辺文彦君） 終わります。

○議長（稲葉昭宏君） 以上で渡辺文彦君の一般質問を終わります。

暫時休憩します。

（午後 1時55分）

---